

(研究ノート)

カフカの文体的特性

山中 博 心*

すでにカフカの『父への手紙』については一度書いているが、その時はいわば手紙の意味、テーマ等に焦点を当てていた。「思うこと」と「現実」の落差あるいは「思い」を「現実」と錯覚すること、36歳の男の人生の幕引きの為の一世一代の「大芝居」、父親との拭うことの出来ない精神的、身体的「違和感」、父親の「一貫性の無さ」への耐え難さと同時に父への「親近性」、「逃亡」と「踏みとどまる」ことの二律背反、「独房」を「楽しみの城」に変えることの不可能性、人間を越えた縦の関係の中での「最高法廷」ではなく、ただ横の関係での「人間の法廷」で決着をつけること、「説明できないものを説明しようとする」伝説への抵抗、「分らないものは分らない」という世界の本質を分ろうとする不遜、「路上の一筋の影に過ぎない溝に落ち込む」所業、逃れ難い「自己観察」、<Tat-Beobachtung>（行為としての観察）さながら眼と化する人間の必然としての「身体性の欠如」と「空転するモノローグ」、言葉に対する深い懐疑を抱きながら書くことにしがみついているカフカの<erschreiben>、絶え間なく続く「発端」、飛ぶことなく繰り返される現実に届かぬ「助走」、常に複数形でしかない「決心」、父親に具現されている「肯定的なもの」と否定的なものの混在」に対する嫌悪、騙し絵のごとく同時に出現することのない

* 福岡大学人文学部教授

「地」と「図」の間の揺れ、『父への手紙』の結末部の父からの反論の形をとった息子の「攻撃」と「自己批判」、焦点が二つの「楕円」ではなく一つの「円」を求めて止まない息子、そういった意味では結局、誰かに宛てた「手紙」も、複数の読者を目指す「作品」も自分に充てた書簡という体裁を取らざるを得ないカフカにとっての「書く」ことの問題等々。

こうした世界がどのように描かれているかを考察することが今回のテーマである。同種の作業は『変身』でも行なっている。「戦い」というカフカ特有の問題は主観的な描き方に象徴的に現れている。例えば『ある戦いの手記』の中で、お気に入りの娘が姿を現さない時に「奇妙な姿勢で祈る男」を腹立たしく許せない男の視界から、お目当ての娘が教会に姿を見せると不思議と「祈る男」は姿を消している。この構図はカフカの作品に繰り返し見受けられる「地」と「図」の構図である。同時に Gestalt（形）を形成することはなく、また反転しかねない構図。しかもこの話しの終わり方がまた奇妙である。「告白を取り消すとき本音が覗く」、という敵対する者との「和解」の仄めかしは人間にとって主義主張に基づく「正当な」争いが如何に根拠がないか、また世界を見る視点が如何に不確であるかを説いている、と同時に「個」ではなく「場」としての世界の肯定でもある。また『比喩について』の賢者の謎めいた「向こうへ行け」という言葉も立つ位置を変えない限り、固定観念に縛り付けられ、相手との意思疎通は絶望的であり賢者の言葉は空言に墮してしまう。まさに『掟の門』の田舎から来た男の視野狭窄がそれである。男の目指す者は「掟」であり、その思い込みに基づく観察が度を超し、最後には微小な「ノミ」にまで助けを求めてしまうほど、男は「分別」を失い細部に拘泥し「全体像」を喪失している。男には諦めて「門を後にする」が危険を冒して「門の中に踏み込む」という可能性は閉ざされている。カフカの言い回しで言えば「理解できないものは存在しないが如く」である。「誘惑」であると同時に「禁止」でもある「今は駄

目だ」という門番の台詞に自分の期待を膨らませてただ「待つこと」は眺望的視点からは死を意味している。そのことは結末の門番の「この門はお前のものと決められている」という言葉に如実に示されている。極めて「個的」な事柄を「一般的」な次元で捉えた田舎の男の悲劇である。また『審判』の書き出しの「誰かがヨーゼフ・Kを中傷したに違いない」といった極めて主観的な言及によってバイアスが掛けられ、普通読者もヨーゼフ・K同様「悪いのは世間である」と確信する。中立的な位置からの語りならば、「何も悪いことをしていないのに、ある朝ヨーゼフ・Kは突然逮捕された。彼は誰かが中傷したのだ、と言う」という記述に近いものになるであろう。その場合読者には主人公の思い込みではないかという疑問を挟み込む余地が残されている。これこそシュタインツェルの「語りの構造」の Personal -Erzählungssituation (語り手が主人公の視点で語る) であり、バイスナーの言う「一義的語り」(einsinnig) の効果であり、「劇的叙述」と「報告的叙述」の混同である。しかも三人称であることの見せかけの「客観性」が逆に効果を上げている。このことは『掟の前』の解釈の相違に重ねられる。『審判』のヨーゼフ・Kが挿話「掟の前」について、教誨師に対して田舎から出てきた男が門番に騙されていると主張したことに対して、教誨師は「真理」ではなく「必然」が問題だと論ず。「真理」は議の対象になるが、「必然」には言葉の入る余地がない。これもまたカフカの作品を特徴づける論理の寸断、視点の複数化とまったく交差することのない会話である。

こうした見方の違いは『天井桟敷』において如実に現れている。桟敷の男の曲馬乗りの娘に対する感情移入を示す、息の長い接続法を多用した否定的な前半の世界描写と、男の色眼鏡を取り去った直説法とセミコロンで描かれた中性的で肯定的な後半の描写が好対照をなしている。最後に男が我とも知らず涙することはカフカの作品の主人公にありがちな、思い入れ強き者と世界の乖離を

表している。自分の想いが絶対的なものになり蜃気楼を見ている状況は、何かを自分のコントロール下に置こうとする点で『ブルームフェルト』も同様である。独身男の本来「同行者」であるべきセルロイドのボールとの無益な葛藤、犬を飼うことの一方的なデメリット面の肥大化、助手達に対する身勝手な対応も世界との「共存」の不可能性の事例である。その意味では『家長の心配』の得体のしれない「オドラデク」の存在規定をめぐる悪戦苦闘もまた焦燥感を募らせ、心配を増殖させるばかりである。全てが枠に収まらなないと気が済まない気質が不安を生むという点では『巣穴』はその典型であろう。「完璧」に出来上がった巣穴は非の打ち所がないはずなのに、一瞬心を翳めた不安が「巣穴」の住人を心穏やかならざるものにする。単なる「可能性」に過ぎないものが「現実性」を帯び、後は「シュツ、シュツ」という出所の定かならぬ違和なる音が住人の不安を煽るばかりである。「敵」を探して建物の中を右往左往するが巣穴のどこに行ってもその音が「同じ強さ」で聞こえるのであれば、問題は「外部」ではなく住人の「内部」にある筈である。これは『城』が見る者によって違った形をしているということとも通じる。そこには対象物が客観的に存在するのかという大きな疑問が浮上する。そもそも主人公Kが初めての所に到着した時、深い雪と闇に覆われていて「城」の姿を窺うことはできない、しかしKは「大きな城」を闇の向こうに想定している。このことは「測量師」という身分をめぐる城からの知らせが「測量師」であることの不確かさに相応している。主人公のKは招聘を受けた「筈」の「測量士」の身分の信憑性を城との間の力関係にすり替えて行く。あれだけ「客観的な」真実を錦の御旗とするKの「正義」の恣意性が浮き彫りになる。ただ城に至り着きたいという彼の思いだけが肥大化する。さらに『断食芸人』でも、そもそもこれは「断食」と言えるのかという疑問がある。なぜなら空腹を我慢するのではなく、食べたいものがないために食べないとすれば「断食」が成立することはないであろうし、苦しみの表情を浮かべることのない仙人のような断食芸人と観る者と

の間に共感が生まれることはないであろう。

世界と遊離するカフカ、「結婚」と「書くこと」の二律背反を背負い込みながら、二度に渡ってフェリツェと婚約解消せざるを得ないカフカは「書く」為に「絶対的な孤独」を必要とし、自分の孤独を「ロビンソン・クルーソー」のような孤独でなく、比較を絶した「カフカのように孤独」と表現する。その意味ではフェリーツェへの手紙は結婚への思いを一方向的に述べるモノロークに近いと言える。こうした特徴は問題の『父への手紙』においても見ることができる。「弁護士の」な手法で父に対する自分の正当性を、自分に有利なように叔父、姉妹、甥っ子等を例にだしながら、K、ヨーゼフ・K、ブルームフェルトがそうであったように、「利用できる」材料を駆使して訴える。ここでも世界を誇張し図式化する思考は健在である。ドイツ語の原文を読んだ時に気になるのは all-（「すべて」）の類いが可成り多く（99回）、それにつれて nichts（「何もない」）も多い（36回）。全体がいわばオール・オア・ナッシング的な様相を呈している。味方と敵という色分け。呼応するように jeder（「どの」）（33回）、immer（「いつも」）（42回）、wieder（「またしても」）（13回）、vollständig、gänzlich（「完璧に」）や形容詞の最高級、so、solcher（「そのような」）（101回）といったイメージを増幅させるものや、相手を誘導・説得する ja（70回）、強意の nur、gerade、eben（108回）、また『変身』でしばしば見られる主人公と語り手の視点の重なりを証する修辭的な「？」や「！」が地の文に散見される。こうしたものは全て自分に有利に事を運ぶ為のものである。また事実の信憑性を疑わせる副詞 vielleicht（「ひょっとしたら」）、や小品『樹々』の世界を不安定なものにし、何処までも「論理の空転」を促す動詞 scheinen（「～ように見える」）も多用されている。そもそもこの小品の出だしの denn（「なぜなら」）という理由付けからして不自然である。少なくとも並列の接続詞 denn は何かの叙述の後に出てくるものであり、冒頭に出現することはあり得ない。しかしてその後の命題が成立するかどうか極めて疑わしい。こうしたカフカ特

有の言語使用の特性を『父への手紙』から2・3の例を抜き出して例示する。

最初の例はKKA（『批評版カフカ全集』）のNachgelassene Schriften und Fragmente IIの中の143～144頁に股がる最初の45行である。

手紙の書き始めの「親愛なる父上」という呼びかけの後に醒めた論理的理由付けのweil（なぜなら）が10行余りの間に3回使用されている。とりわけ最初のweilには、前文にdeshalbを添えており、堅苦しさや仰々しさを感じざるを得ない。まさに争いに臨む弁護士のような口ぶりである。さらにall-が3回、それに呼応するかのようにnichtsが1回、nie（「決してない」）が2回nie-mals（「決してない」）が1回、kein-が3回、nichtが5回、un-が2回と否定的単語の多さが眼につく。まさにカフカの物語に見られる戦いの構図そのものである。こちらとあちらは水と油で折り合う余地はない。そうした全肯定と全否定の対置は主人公側の誇張癖に拠るところが大であろう。

また177～178頁に渡る27行には子供である自分の特性を表すのに10個の形容詞を不定冠詞einとKindの間に並べており、極めて異常である。また強調の為のso sehr 2回、強意のnur 3回、gerade 1回、gar 1回、形容詞の最上級3回というように「我が思い」を増幅させる語句が頻出している。

さらに196頁の27行にはaber（「しかし」）が8回出て来る。『巣穴』の中で「外敵」の正体を探ろうと試行錯誤する住人の論理の空転に頻出したaberである。それに比例してimmerも3回使用され、それによって何かを誇張する為とその反動として「現実感」を喪失し、思考が空回りしている。何かを確定しなければ気がすまないものが陥る袋小路、カフカの言葉を借りれば「我が砦、わが独房」である。

さらに現実には足を踏み入れる前にその「可能性」が「現実性」を帯びて来るカフカの心性を表しているものとして、211～212頁にかけての23行にMöglichkeitが3回出て来る。カフカの世界では精神疾患者のように、可能性

と現実の間には強固な壁がない。この箇所でも「現実」を否定し、自分の世界を強固にする為の aber と nichts や un-, kein- が使用されている。

『父への手紙』の215～216頁のほぼ2頁にはカフカの文体の特徴である、現実を主観的に色づける接続法や話法の助動詞が多用されている。特に話法の助動詞 wollen (「～したい」) が6回と多く、können (「～かもしれない」) が3回、接続法が4回と通常のドイツ語使用からして目につく。如何にカフカの世界が非現実性を帯びているかの証左である。しかしこの手紙においても徹底した戦いは起こらず、「和解」を暗示するような終わり方になっている。「我々二人の気持が少しばかり穏やかになり、生きることと死ぬことを楽にするため」に書かれた手紙であることを打ち明ける。

こうした文を手がかりに読む者は「これは現実？」という疑問を抱かざるを得ない。そもそも対話なのか、むしろ独白ではないか？この手紙の場合カフカから父に宛てた一方的な手紙であり一人称で書かれているが三人称の場合は同じであろうか。例えば Gregor という三人称の物語『変身』と一人称の『父への手紙』を比較して特徴的なことは、全体で86頁と75頁の作品に aber (doch) が『変身』164回、『父への手紙』167回、話法の助動詞は240対235、接続法第Ⅱ式は129対104、否定語 nicht、nichts、nie、un-等は『変身』427回で『父への手紙』356回+(nie、niemand 21回)であり、可成りの相関性が認められる。こうした言語使用がほぼ同程度の割合であるとすれば、「三人称の物語」と「一人称の手紙」であっても同じような視点から世界が描かれていると考えられる。戦いの構図を取りながら、決して戦いは起こらず、『祈る男との対話』がそうであったように『父への手紙』でも「対等」であることを願い、和解を旨としている。自分が消えてなくならなければならない、という『変身』のグレゴールの思い、投身の死刑判決を父親から受けた『判決』の息子ゲオルグの「それでも両親を愛している」、という台詞、『審判』のヨーゼフ・K

の処刑の場での自分の手で始末を付けなければ、という自戒等はそれまでの世界に向かう姿勢を翻すものである。

こうしたカフカの作品の語りの特質は生きることが内包する矛盾を運命的に抱えたカフカ自身の精神から生まれたものであろう。矛盾そのものを生きることが出来ないカフカは常にフェリーツェとの関係がそうであったようにダブルバインド状態に陥る危険性を抱えていたと言える。その意味では病理学的に彼を「統合失調症」の類例に挙げる者もいるが、「和解」の可能性を秘めていることからして決して最終的な危機に陥ることはなかったであろう。そのことはもう一段高いところからの語りを交えるという描写の在り方から窺える。逆にそうした語りの在り方は一貫性に欠ける批判の対象ではあるが、それこそがカフカの作品の「リアリティー」を保証するものである。単にバイスナーが言うところの「一義的語り」ではなく、シュタンツェルの分類による「全能の語り」に近いもの介入が想定される。それがエンジンブレイキのように働き、単なる主観性の肥大ではなく客観性を付与し、カフカの作品に幅と深みを与えている。その時、「世界とお前の戦いでは世界に味方せよ」というカフカの言葉が大きな意味を持っている。

上記のようなカフカ本人の性格及びカフカの作品の構図に関係するであろう言葉を彼のアフォリズムの中から挙げておく。

「われわれは、地上のものに汚れた目で見れば、長いトンネルのなかで事故にあった鉄道旅行者の状況にある。しかもその場所は入口の光はもう見えないが出口の光もあまりに小さくて、目は絶えず探していなければならないほど絶えず見失ってしまう、しかも始まりも終わりも、入口も出口も定かではない。」

「外部から世界を、理論でもっていつも意気揚々と押さえつけ、同時にともども墓穴に落ちてしまうかもしれない。そうでなくてひたすら内部から、自分と世界を静かに、真実に受け止めていること。」

「剣に魂を突きさされたときに肝要なのは——落ち着いて眺めること、血を一滴も失わないこと、剣の冷たさを石の冷たさでもって受け入れること。突かれたことによって、また突かれた後、不死身になること。」

「言葉に出すということは、基本的に確信の弱体化を意味するものではない——そのことなら嘆くに及ばないだろう——そうではなくて、それは確信が弱体であることを意味している。」

「恍惚とする者と溺れる者——どちらも両手を高く上げる。前者は自然の地水火風との一致合体を、後者はそれとの抗争を証言する。」

「信じるとは、自分のなかの＜不壊なるもの＞を解放すること、より正確には、自分を解放すること、より正確には、不壊であること、より正確には、＜在る＞こと。」

「誰もが真実を見ることができるとはいえない、しかし真実で＜ある＞ことはできる。」

「自殺者は囚人である。この囚人は監獄の中庭に絞首台が立てられるのを見て、誤って自分のためのものだと思い込み、夜中に独房を破って脱出し、庭に降りて自ら縊死するのである。」

「自己を振るい落とすことなく、自己を啖いつくすこと。」

「観察者は、ある意味で〈共に生きる者〉である。彼は〈生けるもの〉にしがみつくと、彼は風に歩調を合わせようとする。こんなものに、わたしはなりたくない。」

「生きるとは、生のなかにいることであり、わたしが生を創り出したときの眼差しで生を見ることである。」

「未来のことだけ気配りする者は、瞬間のことだけ気配りする者よりも周到な気配りがあるとはいえない。なぜなら彼は瞬間のことはどうでもよくて、瞬間の持続のことだけに気配りしているのだから。」

「観想と行動は、どちらも見かけは真実である。しかし観想から送り出された、あるいはむしろ観想に戻ってゆく行動にしてはじめて真実なのである。」

「家庭生活、友情、結婚、職業、文学、これらすべてにおいてわたしを失敗させる、あるいは失敗すらさせてくれないもの、それは怠惰でも、悪意でも、不手際でもなくて———大地と、空気と、内なる掬の欠落である。」

「人間は誰でも、正当化されない生を生きることはできない。これに惑わされて、人間はその生を、さまざまな正当化によって基礎固めするのだという考えがでてくる。」

「彼には精神が多すぎる。彼は自分の精神に乗かって、魔法の馬車みたいに地上を駆けめぐる、道でないところでさえも。そして自分では、そこに道がないことに気づくことがない。」

「ほんとうの道は、一本の綱の上を通っているのだが、綱が張られているのは高いところではなくて、地面すれすれである。それは歩かせるためというよりは、むしろつまずかせるためのもののように見える。」 [1]

「人間には二つの大罪があり、他のすべての罪はここから導かれる——つまり<性急さ>と<投げやり>である。」 [3]

「ある一つの地点から先は、もう後戻りがきかない。こうした地点に到達しなくてはならない。」 [5]

「人が抱きうる見解の相違、たとえば一個の林檎について——テーブルの上の林檎をもっとそばで見ようと首をのぼさねばならぬ小さな男の子の見解と、その林檎を手にとって食卓の全員にいくらでも渡してやれる家長の見解と。」

[11/12]

「鳥籠が、鳥を探しに出かけていった。」 [16]

「お前の立っている大地が、両足が覆う以上の大きさではありえないという幸福を理解すること。」 [24]

「否定的なものを行なうことは、まだわれわれに<課せられて>いることである。肯定的なものは、すでに与えられている。」 [27]

「お前は<所有>はしているが<存在>はしていない、という主張に対する彼の答えは、身震いと心臓の動悸だけだった。」 [37]

「道は無限だ、ここでは少しでも引いたり、少しでも足したりはできない、だのにめいめい各自無邪気な物差をあててみたりする。」 [39a]

「「ザイン」ということばはドイツ語では、二通りの意味がある——〈存在する〉と〈何々の＝何かに属する〉と。」 [46]

「お前と世界の決闘に際しては、世界に介添えせよ。」 [52]

「ことばというものは、感覚の世界以外のすべてに対しては、ひたすら暗示的にしか使うことはできない、ほんのおおよそのところで比喩的に使うことも、決してできないのである。それはことばが、感覚の世界に対応して、所有と所有関係だけを扱うからだ。」 [57]

「存在するのはひとつの精神的世界以外のなにものでもないという事実は、われわれから希望を奪い、われわれに確信を与える。」 [62]

「〈家の守護神〉への信仰ほど心楽しいものがあるだろうか！」 [68]

「理論的には、完全な〈幸福の可能性〉というものがある——自らの内にある〈不壊なるもの〉を信じ、かつそれに向かって賢明に努力しないこと。」 [69]

「不壊なるものはただ一つある、それぞれ個々の人間がそれであり、同時にそれはあらゆる人間に共通している。そこに人間同士の比類なく分ちがたい結びつきがある。」 [70～71]

「彼は自分の食卓から床にこぼれ落ちたものをむさぼり食う。そのため彼はた

しかに、しばらくの間は他の誰よりも満腹するけれども、上の食卓で食べることを忘れてしまう。そのため今度は、こぼれ落ちるものまでなくなってしまおう。」 [73]

「人類を手がかりに自己を検証せよ。疑念をもつものに人類は疑念をもたせ、信仰をもつものには信仰をもたせる。」 [75]

「人々との付き合いによって、自己観察へとそそのかされる。」 [77]

「真実は分割不可能なものだ、だから自分自身を認識できないでいる。真実を認識できると称するものがいたとしたら、＜虚偽＞がそれにちがいない。」 [80]

「われわれが罪を犯したのは、認識の木の実を食べたばかりではなくて、生命の木の実をまだ食べていないからである。我々のおかれている状況が罪を犯している、罪責そのものとは無関係に。」 [83]

「二つの可能性——自分を無限に小さくすること、それとも無限に小さく＜ある＞こと。最初のほうは完成、つまり無為、二番目のほうは開始、つまり行為。」 [90]

「、、、われわれは（我々自身と、また同じくらい人類とも深く結びつきながら）この世のすべての苦しみをくぐり抜けて進展する、、、」 [102]

「お前が家を出て行く必要はない。じっとお前のデスクに坐って、耳を澄ますがいい。耳を澄ますこともない、ただ待つがいい。待つこともない、すっかり黙ってひとりであるがいい。お前の前に世界は姿を現わし、仮面を脱ぐだろう、

世界はそうするほかないのだ。恍惚として、世界はお前の前で身をくねらすことだろう。」[番号なし]

こうしたカフカのことばをさらに日記、手紙から取り出し、『変身』と同時期に書かれ、テーマもほぼ同じくする『判決』の文体分析を行ない、バイスナー、シュタンツェルを手がかりにより総合的にカフカの語りの特性と作品の意味の関係を探求したい。なお上記のアフォリズムの訳は『フランツ・カフカ 夢・アフォリズム・詩』（吉田仙太郎編・訳 平凡社ライブラリー）を使わせて頂きました。